

詩の世界へようこそ！

詩のこころを読む

茨木のり子 著



岩波ジュニア新書

『詩のこころを読む』 茨木 のり子・著

出版社：岩波書店（岩波ジュニア新書・刊） ISBN：978-4-00-500009-8

本が好きな人でも「詩って何だか難しいし、意味が分かんなくて苦手だなあ」と感じる人はたくさんいらっしゃるんじゃないでしょうか。詩集はそんなに売れるものじゃない、ということも聞きますし。

私もそうでした。短歌は楽しめても、詩は敬遠していました。そんな人におすすめするのが、この本です。

紹介されている詩が日常的な言葉で書かれていて、とにかく読みやすい、分かりやすいのです。これは、著者が茨木のり子さんだから、ということが大きいと思います。茨木さんの詩に対

する考え方が表れているのでしょう。そして彼女が本当に好きな詩を選んでいるのを感じます。歴史的価値とか文学的価値で選ばれていないのが分かります。

そしてもう一つ、茨木さんの文章から、とてもあたたかでまっすぐな人間性を感じるんですよえ。それもこの本の魅力。

これからも、読み継がれるであろう名著です。



桶川市立中央図書館スタッフが選んだオススメ本「茨木のり子特集」

『茨木のり子集 言の葉-1』

茨木 のり子・著
出版社：筑摩書房 ISBN：978-4-480-70561-7

1950-60年代の作品！言葉の魅力を味わって下さい！

『茨木のり子 没後10年「言の葉」のちから』

出版社：河出書房新社 ISBN：978-4-309-97898-7

代表詩選掲載 凛とした言葉たちにドキリとします。

『歳月』 茨木 のり子・著

出版社：花神社 ISBN：978-4-7602-1867-7

亡き夫、三浦安信への深い愛が静かに胸に響く詩集です。

『寄りかからず』

茨木 のり子・著
出版社：筑摩書房 ISBN：978-4-480-80350-4

やさしい言葉が並んでいるのに、それだけではない鮮烈な想いを感じます。王道な本ですが、茨木のり子の人気詩集なのでぜひ！

『猯さんがゆく』

茨木 のり子・著
出版社：童話屋 ISBN：978-4-88747-005-7

おらかな山之口猯にむけるやさしい視線に、つい、つられてしまいます

テーマに沿った本を
図書館に蔵書があるものから
選んでみました。
図書館を
是非ご利用ください。



OKEGAWA hon プラス+とは

OKEGAWA hon プラス+イベントスペースでは、OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）が主催して博物館、大学、出版社等と連携し、桶川の市民サービス向上のため、子ども向けから大人向けまで幅広い世代を対象とした学びのサポートをしています。

OKEGAWA hon プラス+でのイベントの予定についてはこちらをご覧ください▶

※QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。



おけがわマイン 3F

〒363-0022 埼玉県桶川市若宮1-5-2

OKEGAWA hon プラス+

☎ 048-786-6353 桶川市立中央図書館

発行者：OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）
「202607」



OKEGAWA

オケガワホンプラス

hon プラス+ 通信

No. 33

不定期発行



テーマは 生誕100周年 詩人 茨木のり子の世界

今回は、2026年に生誕 100周年を迎えた詩人、茨木のり子特集です。

激動の時代を軽やかに、凛と生き抜いた彼女の言葉や素顔に、ご紹介するさまざまな本を通して、出会ってみませんか。

冒頭には、茨木のり子さんと親交の深かったアナウンサーの山根基世氏より、寄稿文を頂きました。



茨木さんが書かなかったこと

山根 基世

担当していたラジオ番組に出演していただいたご縁で、茨木のり子さんたちと、小さな旅に出たのは、2005年、亡くなる前の年の春だった。このとき交わした会話で、ずっと気になっていたことがある。私が母親との確執に悩んできたことをお話ししたときのこと。茨木さんは驚いたように「まあ、実の母親でもそうなの」と一言漏らして、それきり口をつぐんでしまわれた。その後に「・・・」と、無言の言葉が続くような沈黙を感じた。茨木さんは11歳の時生母を亡くされ、13歳のとき父親が再婚、新しい母親との暮らしが始まったことを私は知っていた。

以来、茨木さんの詩の中に「母」の姿を探してきた。全集にも目をとおしてみたが、ひとつだけ「東北弁」という題で「庄内弁をしゃべりまくる母は天馬空に行くがごとしであった」と愛情深く書いたエッセイがあった。しかし詩は見当たらない。父親は詩にもエッセイにも登場し、「吉良町のチェホフ」として魅力的に描かれているのに、母親については、かくも寡黙なのはなぜか？

最近出た「詩人茨木のり子の誕生」を読んで驚いた。著者・熊谷誠人氏は2019年に NHK放送博物館で、茨木さんのラジオドラマ「電話」の脚本を見つけた。母を病気で亡くした小学生が、心の中の電話のダイヤルを回して亡き母と対話をし、それを支えに健気に生きる姿が描かれている。これが茨木さんの原体験をもとに母を描いた唯一の作品だとつきとめているのだ。

母については書きたいことは溢れるほどあっただろうが、そのことが継母や周囲を傷つけることにもなりかねない。茨木さんの中の抑制の美学が窺える。沈黙の中でこそ、深まっていくものもあったにちがいない。



しなやかに暮らす、大人の女性

『おんなのことば』

茨木 のり子・詩 出版社：童話屋 ISBN：978-4-924684-78-2

「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」——この有名なフレーズから、茨木のり子さんは強くて厳しい人、漠然とそんなイメージをもっていました。でも本書に並ぶのは、季節のうつりかわりや恋、世間話など、日々の営みをユーモア混じりに面白がっている“ごきげん”な言葉たちです。もちろんその底には

凜とした芯の強さがあるのですが、けっして気取っていません。しなやかな暮らしのなかに、溶け込むように、詩の言葉やリズムが存在しています。

「生きるってけっこう楽しいものよ」と、お茶を淹れながら微笑みかけてくれるような、そんな「ごきげんな大人」に出会える一冊です。

・桶川図書館に蔵書があります

清冽に生きた人

『清冽 詩人茨木のり子の肖像』

後藤 正治・著 出版社：中央公論新社（中公文庫・刊） ISBN：978-4-12-206037-1

ノンフィクションの名手が、「現代詩の長女」と言われた詩人茨木のり子さんの七十九年の「清冽」な生涯を、哀惜を込めて描いた本です。

大正の最後の年に生まれた茨木さんは、その青春を戦争とともに過ごした後、戦後に詩人となり、数々の詩集を出して、特に生前最後の詩集『倚りかからず』は詩集としては異例の売れ行きとなりました。多くの作品が教科書にも載っており、授業で最初に彼女の詩に触れた人も多いのではないのでしょうか。

詩人としても成功し、比較的裕福な家に生まれた茨木さんは、生活スタイルもお洒落で、彼女の自宅やライフスタイルを紹介する本も出ており、一見恵まれた人生にも見えます。

しかし、軍国主義から民主主義への価値観の転換、青春期の挫折、数々の身近な人との別れ、晩年の孤独、と実はとても陰影のあったものだったことがこの本で教えられます。それにも関わらず、彼女がまさに凜と清冽な生き方をしたことを、著者は丁寧な取材で明らかにしてゆくのです。彼女の詩が、より味わい深くなります。

・中央図書館に蔵書があります

詩とともにあった半生を辿って

『茨木のり子詩集』 茨木 のり子・作 谷川 俊太郎・選

出版社：岩波書店（岩波文庫・刊） ISBN：978-4-00-311951-8

いつでも手元に置いておける、文庫で読める茨木のり子作品の決定版です。

本詩集は、各詩集の抜粋版ですが、各詩集の発表年代順・収録順に並んでおり、編者であり親交の深かった谷川俊太郎さんのリスペクトが光ります。

茨木のり子さんは十九歳のときに終戦を迎え、はじめの詩集は二十九歳のころに刊行。各詩集の発表年や、巻末にある彼女の年表を確かめながら、あなたの年齢を自然に重ねて、ぜひともページをめくってみてください。

難解な言葉や、装飾・比喩はほとんど使われていません。青春時代のみずみずしい感性、日常の機微、そして最愛の夫を亡くしたあとの切ない等身大の恋心へ。一人の人間が美しく年齢を重ね生きてきた、まっすぐな言葉が染み渡る、深い味わいのある大人の読書になると思います。

おしゃれに暮らした詩人

『装いの翼 おしゃれと表現と』

行司 千絵・著 出版社：岩波書店 ISBN：978-4-00-025477-9

詩人・茨木のり子の軌跡を、「装い」というテーマで取材して書かれた本です。

裕福な家庭で育ち、結婚後も経済的に余裕があった彼女ですが、きらびやかな宝石類は好まず、洋裁の技術で自ら洋服を仕立て、確かな審美眼とともにシンプルで品位ある装いをしていることが多かったようです。流行に振り回されない確固たる「生活のスタイル」を感じさせます。一方で「あなたに似合うとおもって」と惜しみなく大切な人にファッションアイテムをプレゼントするエピソードから

は、暮らしのいつくしみ方と心の豊かさを教えてもらえる一冊です。

身にまとうものは、その人の生き方そのものの表明であるのかもしれませんが。他人の目でなく、自分の心地よさと美学を基準に選んでいることは、彼女が紡ぐ詩を書く姿勢とも共鳴しているように思えます。

住んだ家も作品なんだ

『茨木のり子の家』

茨木 のり子・著 出版社：平凡社 ISBN：978-4-582-83480-2

茨木のり子さんは、三十二歳の時に自分の好みの家を建て、七十九歳で亡くなるまでそこで暮らしました。四十九歳の年に夫の三浦安信さんが亡くなってからの約三十年は、一人暮らしでした。

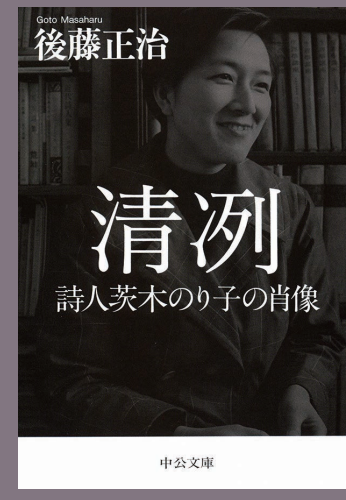
この本は、彼女が亡くなるまで愛着を持って住み続けた家の写真集です。庭、玄関、階段、台所、居間、日常に使った道具たち・・・どの写真にも彼女の美意識や、丁寧に生活をしよう、という姿勢が感じられます。それが彼女の

詩の世界にも呼応するようです。

彼女が書き溜めて生前には公開を許さなかった、亡き夫への愛を込めた詩の原稿の入った「Y」（安信さんのイニシャルでしょうか）と書かれた箱。

そして生前用意していた、自分が亡くなった後のために書いた「お別れの言葉」には心を打たれます。

凜として潔く、そして、そこはかたなく漂うユーモア・・・。見事な彼女の作品ではないのでしょうか。



・中央図書館に蔵書があります

